

太王四神記 第8話 張り巡らされた罠(わな)

2008(平成20)年2月25日 鑑賞<梅田ブルク7>

★★★★



監督=キム・ジョンハク/出演=ベ・ヨンジュン/イ・ジア/ムン・ソリ/パク・サンウォン/ユン・テヨン/トッコ・ヨンジェ/オ・グァンロク/チェ・ミンス/パク・ソンミン/ミン・ジオ/キム・ミギョン/パク・ソンウン/パク・ジョンハク/イ・ダヒ (2007年韓国ドラマ/61分)

……ヨン家の牢獄からの黒軍選手とスジニの脱獄劇もワナ……？ 人質救出作戦もワナ……？ だとすると、人質を殺されてしまった3部族長たちの怒りがヤン王に向かったのは当然で、今や宮殿を守るのはわずかな近衛隊のみ。トップ会談も決裂した今、遂に反乱軍の突入か……？ そこへ駆けつけていたタムドクたちも、城門が閉じられ万事休す。さあ、この後の展開は第9話以降に乞うご期待！

脱獄がハイライトの1つだが……

第8話のハイライトの1つは、パソン（キム・ミギョン）の鍛冶屋に集まっているチュムチ（パク・ソンウン）率いる傭兵軍団による、ヨン家の牢獄に入れられている Cholro 部族のセドウルら黒軍選手とスジニ（イ・ジア）たちの脱獄の物語。

傭兵は金によって動くものだから、スジニを救出しなければならぬ村長のヒョンゴ（オ・グァンロク）が真っ先にカネを準備して依頼すべきだが、実際にそれを依頼したのは、何と火天会の大長老の側近であるサリヤン（パク・ソンミン）。もちろん脱獄さえできれば、それはそれでいいのだが、一体サリヤンは何のために傭兵たちにそんな依頼を。何か怪しいと思うのは当然。

しかして、焼け落ちてしまった牢獄の跡には Cholro 部族の名札が。こりゃきっとサリヤンがわざと落としていったもの。すると、これらはすべて大長老（チェ・ミンス）が仕組んだ策略……？

特集

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

キハと大長老との議論の論点は……？

第8話には、第1話の、ファヌン（ベ・ヨンジュン）によって火の力を奪われた虎族の女カジン（ムン・ソリ）が、山の頂上から自ら落ちることによって命を絶つシーンが再登場する。それは、カジンの生まれ変わりであるキハに対して、「カジンと同じような愚かな誤った道を進むことによって、高句麗の民を苦しめるのですか？」という大長老なりの問題提起をするため……？

たしかにキハは、一方では大長老から押された烙印のために、3部族の部族長たちの前で、ホゲこそがチュシンの星の下に生まれたチュシンの王であることを示す行動をとったが、これはあくまで大長老のコントロール下でなされたもの。彼女の真意は、ただ愛するタムドクとひっそりと過ごしたいというごく平凡なもので、どうもそれはタムドクも同じよう。もちろんそんな風に自分の思いどおりにできれば何の問題もないのだが、人にはそれぞれ天命があり、それを果たさなければならないから話はややこしい。またそうだからこそ、こんな壮大な歴史絵巻が生まれるわけだ。

人質救出作戦がかえって窮地に

第8話のハイライトの本筋は、新王の即位式をめぐるヤン王（トッコ・ヨンジェ）と3部族の意見を自由に操ってそれを阻止しようとするガリョ（パク・サンウォン）との対決。

人質救出にこだわるタムドクは、自らの危険を省みず、その救出に向かったが、やっと脱獄に成功したセドゥルたちはこれ以上タムドクと関わり合いになるのは御免とばかり、一路 Cholro 部族の国へ帰ろうとした。それに異を唱えたのがスジニ。あのキョック大会の決勝戦の前日暴漢に襲われたところを助けてもらった恩を忘れてしまったのかという指摘だ。そんな痛いところをつかれたセドゥル（ミン・ジオ）たちは結局スジニと共にタムドクを応援すべく、3部族の息子たちが人質とされているヤン王の小屋に向かったが……。

もし、セドゥルたちの脱獄も、タムドクたちが人質救出に向かうのも、すべて大長老の想定範囲内だとすれば……？ そして彼らが小屋に到着したところで、もし人質たちが切り殺されていれば……？ また、その現場に3部族の部族長たちが人質救出のために到着したとすれば……？ そこから導かれる結論はただ1つ。タムドクが

ヤン王の命を受けて人質たちを切り殺したということだ。そうだとすると、そんなヤン王を王と認めることができるのか？ またそんな太子を新王とすることができるのか？ それに対する3部族の部族長たちの答えは明らかだし、同時にそれはガリヨや大長老が望む結論と同じもの……。

遂に反乱……？

他方、大殿では新王の即位式を何としてもやり切ろうとするヤン王と、息子たちの解放が先だと主張する3部族長らの対立が続いていた。そこに届いた報告が、「チオル口部族が脱獄した」というもの。そうなると、「我々の息子はまだ人質のままなのに……」と、3部族長の怒りが収まらないのは当然。その声をバックとして、ガリヨは遂に「これは王が仕掛けた戦いです！」と宣言したから、ここについに反乱が発生することに。

東西南の門が破られ、兵たちが突入してきたが、宮殿を守るのは近衛兵と騎馬隊だけ。そのうえ騎馬隊は貴族の子弟たちで編成された精鋭部隊だから、部族間抗争になるとどこまで機能するか少し疑問も……。

トップ会談も決裂！

今や宮殿とヤン王は絶体絶命の危機に陥っていたが、そこに登場したのがヨン・ガリヨ。つまり、武力を行使せずトップ会談によって解決しようと出向いてきたわけだ。ガリヨの言い分は、ヤン王がもともと住んでいた土地で息子タムドクと静かに隠居してほしいということだから、ある意味穏やかかつ妥当な提案……？ それさえ約束してくれれば、土地も山も家来もいくらかでも提供しようということだ。

こんな提案に乗るのも、たしかに事態収拾のための1つの方法だが、他方ヤン王にも守らなければならない使命があった。ヤン王は「命など何も惜しくはない。私が恐ろしいのは、自分の使命を果たせなくなることだ」と答えたが、ヤン王の使命とは、すなわち「太子タムドクを高句麗の王にすること」。したがって、これによってトップ会談が決裂したことが明らかに。

そこでヤン王が近衛隊長のコ將軍（バク・ジョンハク）に下した命令は、「城を出てタムドクを捜せ」というもの。さらに「タムドクが本当の王なら守ってくれ。もしそれがホゲなら、そのときはタムドクを殺してくれ」という過激な命令も。その熱意

に打たれたコ將軍は、宮殿の警備を第2、第3隊に委ねると命じ自分自身は城外へ。さて、これからのコ將軍の活躍は……？ ちなみに、この第3隊の隊長が、謹慎中のタムドクの警護の任務についていたあの美女カクタン（イ・ダヒ）だから、今後は彼女の身にも過酷な試練が……？

ヤン王もタムドクも風前の灯だが……

ヨン・ガリョと3部族長が率いる兵士たちは今にも宮殿の中に突入しようとしていたから、ヤン王と宮殿を守る近衛兵だけでこれを支えきれないことは明らか。他方、人質救出に向かいながらかえって大長老のワナにハマってしまったタムドクたちは、その難を逃れた後再び宮殿に向かい、今やっと到着した。ところが、そこでいきなり城門が閉じられることに。こりゃ万事休す。

さらに、一度はタムドクの命を助けたものの、その甘さを父親と大長老からトコトン追及されたホゲは、「今度こそは」と決意を固め、サリヤン率いる火天会の連中と共にタムドク暗殺のため、顔を火天会の布で覆って出発。

今やヤン王もタムドクもその命は風前の灯だが、その後の展開はまた、第9話～第12話の集中鑑賞で……。

2008(平成20)年2月27日記